

せざれば、用助の子孫なる事詳かならず。按ずるに、三壺記に、寛永八年四月金澤火災城内等炎上の時、關東よりの上使徳山五兵衛・桑山左衛門の兩人金澤到着に付き、南町金屋忠左衛門家に旅宿を設けたるよし載せたり。此の時南町は片側焼けるに、忠左衛門家は無難なりとあり。此の時南町は則ち金谷の地にありし頃なり。されば右忠左衛門は忠兵衛の先祖ならんか。

○御城後町

三壺記に云ふ。寛永十一年の春より六條本願寺の末寺造營のため、加越能三ヶ國を勸進せり。先年は御城西北に當つて後町と云ふ所あり。火災以後移轉を命ぜられ、跡地は侍屋敷に成ると見え、専光寺由來記に、八世慶榮の時利家卿の命に依つて、御城後町と云ふ處にて屋敷拜領仕。利長卿高岡へ御隠居の時慶榮も高岡へ隠居也。御城後町の寺は本願寺の別院に相立ち、則ち東末寺と稱しけるを、利常卿の時當地火災に付町割改められ、右後町の寺地をば奥野主馬上屋敷へ所替すとあり。按ずるに、御城後町は今尾山神社の尻地なる玉泉院丸の下邊の地なるべし。故に御城

うしろ町と呼びたるもの也。

○金谷門前

十二冊定書普請會所部に載せたる元文五年三月金森助右衛門の言上書に、金谷御門前明地の御厩並に近邊之者共塵芥を捨て、御通筋穢敷由を記載せり。金谷門は金谷殿の表門にて、舊藩中は堂形厩門と向ひ合はせにあり。門前は廣みにて、此の廣みをば金谷御門前とも御厩御門前とも呼べり。此の廣みに古松並びあり。是大槻屋敷門前の古木也といひ傳へしかど、廢藩の際伐木して、廣みも今は中學校の圍内と成りたり。

○金谷殿

三州志來因概覽附錄に云ふ。金谷は城外の一殿閣なり。泰雲公暨び大梁公茲に退老し給ふ。故に詩人之を魯の隱公の菟裘に比す。頭註に云ふ。貞享元年十一月二日金谷殿前にて公命じて射手的を射しめ覽給ふ事舊記に見たりと載せたるのみにて、此の地を出丸となし、殿閣を始めて經營ありしことをば、三州志に記載せず。平次按ずるに、此の地は寛永八年四月十四日の火災に罹りける處、同十二年

五月九日の金澤火災の後、金谷の地にありし邸地をば悉く移轉せしめ、跡地をば出丸となし、金屋々敷とは稱せしにや。三壺記に、寛永十一年の春より六條本願寺の末寺造營云々。先年は御城西北に當りて後町と云ふ所にあり。火災以後移轉せられ、跡地は侍屋敷に成ると載せたる火災は八年の火災にて、此の時諸士の邸地と成りたるを、十二年の火災に町地を改められ、金谷の地に居たる者共悉く轉地を命ぜられしと聞ゆ。されば金谷出丸は此の時より成る事知られけり。三州志來因概覽附錄に、金谷後堂は高山南坊第地たりと云ふ。貞享圖説に、金谷第其の初め亭あり。馬場あり。三・四十年來廣式等出來し、公在府には姫君又は備州利章君等の母堂、其の外女性各此の郭内に居らせらるとありといへり。平次按ずるに、貞享より三・四十年前は慶安承應の頃なり。又利章君等の母堂此の郭に居らせらるとあるは、綱紀卿の時なり。寛文元年の日帳に、玉泉院様丸・金谷屋敷兩所池爲堀、奉行板坂吉丞・疋田半平へ申し渡すといふ事見たり。右池は井戸をいへるなるべし。又此の地に殿閣造營の事は延寶の末ならんか。萬卷昌興自記に、延寶

九年三月廿六日金谷屋敷御文庫の前に追廻し之馬場並に御書院・御亭、舊冬被仰出、頃日有増出來、御書院は馬場の御書院と號し、御亭は馬場先の御亭と號すとある、是其の起原ならんか。昌披問答に、貞享元年十一月二日金谷亭前にて射手的を射しめ、公御覽し給ふと見え、護國公年譜に、享保十九年五月廿六日金谷御新宅御巡見、丹後屋敷・蓮池にも被爲入、六月十六日金谷御廣式御造營落成に付、今九つ時前勝丸君御移徙。依つて御使選田勘右衛門を以て御屏風二双・御文臺・御硯箱・晒布二十疋・二種・千疋被進之。同日七時過ぎ御供揃にて金谷御殿へ被爲入。七月朔日金谷御殿於御敷舞臺勝丸君御能被爲成。依之御近習鷹栖左門を以て御重菓子・御肴被進と見えたり。勝丸君は護國公の世子にして、第七世大應公なり。さて此の後明和八年四月十世泰雲公致仕し給ひ、此に居室を造營し居給ひ、享和二年三月十一世大梁公致仕後此に居給ふ。又十三世溫敬公、慶應二年四月致仕し、居室を此に營み居給ひしかど、明治四年九月東京に移住し、殿閣を毀れたたり。

○金谷殿中異變